

家族サロンのある家

家族の時間が重なり合う 新しいキッチンの形

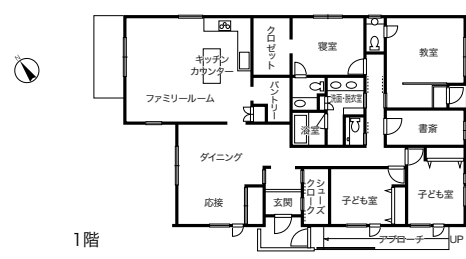
text_中島 久美 photo_堀田 賢治

依頼をいただいたきっかけは、「建築家の家づくり本」を見て、私の事例を気に入ってくださったことです。実際にその家と一緒に訪ね、感動していただくことができました。奥さんはアメリカでの暮らしが長く、今回の家づくりのプランにもアメリカのスタイルが反映されています。

最も特徴的なのは、キッチンを中心にした家族が集う場所となるファミリールームです。お客様を食事に招く機会が多いため、ダイニングと応接を玄関ホールの続きに。その奥にファミリールームを設けました。22帖分、家の中で最も広い空間です。キッチンのシンクやコンロは壁際にL字に配置し、大きなキッチンカウンターを造作しました。ディナー以外の食事のほか、パン生地をこねたり、家族が一緒に料理したりする場所です。お子さん

たちは勉強もここでできますし、食事しながら教えあつたりもできます。カウンターチェアは長時間座っていても疲れず、動きやすく機動的なです。カウンターを中心に忙しい家族が自然に集まり、それぞれの時間が重なる大切な場所にすることができました。

平屋建ては、動線がスムーズで家族の一体感が得られやすいのです。リビングを吹き抜けにし、子ども室の上にロフトを設けたことで、外観にも高さが生まれ、縦貼りのボーダータイルは垂直感のある先進的なイメージのデザインを可能にしています。「建物が優しく包み込んでくれ、家にいるだけで家族それぞれがクリエイティブに活動していける」と、建て主から高い満足度の言葉をいただくことができました。



The house with a family salon

●所在地/岩出市●家族構成/夫婦+子ども2人●敷地面積/309.42㎡(93.59坪)●延床面積/173.73㎡(52.55坪)●用途地域/無指定地域●建ぺい率/70%●容積率/200%●構造・工法/木造軸組工法●竣工/2016年7月●本体工事費/約36,000,000円(税込)●施工/大浦建設株式会社



上/平屋建てだが高さのあるファサード。薄いグレーのタイル地に黒と茶のボーダーをリズムカルに配した外壁が、新鮮さと緊張感を醸し出している。
右/玄関ホール横から見たダイニング。右手奥のファミリールームに続いている。建具を使わない開放された空間が、家族の一体感を高めてくれる。



上/キッチンを中心にしたファミリールームは、家族が自然に集まる場所。キッチンカウンターで食事をつくりながら、食べながら、会話が自然に弾む。
右/奥さんが教える英語教室。出入口を別に設け、居住空間とは分離している。アメリカンスタイルの教室に合わせ、クロスも赤色にして自分らしさを表現。
左/ミントグリーンの大大理石の床が印象的な玄関ホール。曲線で開口したスリットを抜けると、ダイニングへ。

橋 雅彦 1941年和歌山市生まれ。1962年佐藤武夫(早大名誉教授)設計事務所にて6年間勤務。1974年イタリアフィレンツェ大学建築科留学。1975年ミラノのSTUDIO PRO設計事務所にて正所員として勤務。1976年エテルノ建築設計事務所設立。ガラス店装(全国)コンテスト審査員特別賞。その後同展最優秀賞受賞。和歌山県ふるさと建築景観賞受賞。和歌山市優良建築物賞受賞ほか。JIA登録建築家。日本建築学会会員。

A1. 風物など感じたものをスケッチすること、建物などをイメージスケッチすること。
A2. 依頼主の信頼に応え、専門家としてさまざまな提案を繰り返し、依頼主の期待以上の建物を実現するよう常にこころがけています。

建築にとって意匠デザインのあり方が大事。後々まで人に影響を与え続ける
建築は周辺の環境や住む人に影響を与えます。建物から受ける不快な感覚(心に感じるバリア)のものは排除し、快適で気持ちいいと感じるものを採り入れることにより、安らぎ、癒され、心地よい建物となります。一方で、常に予算との闘いを続けています。限られた予算内で依頼主のさまざまな要望を満たしつつ、専門家として建物の普遍的な価値を高めなければなりません。

Q1. 趣味は? Q2. 家づくりで大切にしていることは?